

# 日本ピューリタニズム学会

## 2019 年度 定例研究会

開催日時：2月15日（土）15:30 – 17:30

場所：国際基督教大学教育研究棟1（ERB-1）257 会議室

発表者：住田博子

タイトル：「カルヴァン派国家教会体制と抵抗権思想」

司会：岩井淳（静岡大学）

### 〈報告要旨〉

本報告は、昨年2月に上梓した拙著『カルヴァン政治思想の形成と展開』を、題材を限定して紹介する。同書は宗教改革者ジャン・カルヴァンの指導したジュネーヴ国家教会体制の論理の解明を目指したものである。周知のように、ジュネーヴの体制については毀誉褒貶が激しい。カルヴァン派信者からは自由の実現と評価され、他方批判者たちからは自由抑圧の体制、自由からの逸脱とみなされてきた。本書は、カルヴァン思想の論理と整合的なものとしてジュネーヴの国家教会体制を理解することに努めた。そのための説明変数として、契約神学を用いた。

報告では、ジュネーヴ国家教会体制を支えた論理としての契約神学を取り上げる。具体的には、聖礼典論の中に契約神学を見出す。カルヴァン神学における聖礼典である洗礼と聖餐はいずれも、参加者について、神の民であるか否か認定する機能をもつと考えられる。カルヴァンは神と信者との約束を表現する事柄のみに聖礼典の地位を認め、契約の内実を備えない儀式を聖礼典から外したからである。このような事情のもと、聖礼典への参加資格を定めることは、原理的には、神との契約に与るメンバーシップを画定する行為であり、神の民の共同体の姿を規定することになる。

興味深いことに、著作で分析したカルヴァンの聖礼典論においては、契約神学が特徴的な形を示していた。その特徴とは、契約が集団を単位とする点にあった。彼の洗礼論および聖餐論は、信者各人の適性を厳しく審査するのではなく、信者共同体が全体として神との契約に与っているという論理をとっていた。そうすると、共同体全体として道徳的・靈的に向上しようとする動機は生まれても、個人と神との間に結ばれた契約の是非を問う思考は生まれない。報告では、このような神学によってジュネーヴ国家教会体制が支えられていたことを示したい。

さらに、この契約神学の形がカルヴァン派抵抗権思想に繋がったことにも言及したいと考えている。